苫前町香川三線遺跡
発掘調査報告書
昭和62年3月
抜刷

苫前町香川三線遺跡と擦文文化

—主として生業からのアプローチ—

吉崎 昌一
Masakazu Yoshizaki

第3節 苫前町香川三線遺跡と擦文文化

— 主として生業からのアプローチ —

吉崎 昌一*

(1) 問題の提起

香川三線遺跡は、擦文文化の集落である。だが、よく考えてみると、この集落を性格づける、いわゆる「擦文文化」の基盤となる生業が如何なるものであったのか、研究者間においても共通の見解がもたれているとはいえないのが実状である。単純に擦文文化の遺跡を古代アイヌ民族の残したものであるとし、さらにその生業を説明するのに、江戸時代から明治時代にかけてのアイヌ民族がもっていた生活様式の一部を援用するだけですむのであろうか。それは、あまりにも短絡的な態度というものではないだろうか。

擦文時代は、奈良時代末葉には開始され、鎌倉時代初頭まで続いたという年代的位置づけは、ほぼたしかであろう。また、この時期には、本州から土器・紡織技術・金属器などが大量に流れこんでいることも周知の事実で、その影響は住居の形態までも本州化してしまうほど強いものであった(桜井清彦:1967, pp.63~72, ・乳井洋一ed 1972: pp.50~52)。

そのうえ、北海道の擦文時代と近世の間には、南から大量の和人が侵入して搾取と収奪を繰り返し、その結果ともいえる大幅な人口の変動、疫病の流行など幾多の事件が介在しているのである。こうした歴史的な経緯を考慮にいれることなく、近世~近代初期のアイヌ民族の生活のうちの一部を強調するだけで擦文時代の生活を推論するのは、かなりの無理があると考えてよい。

では、発掘によって得られた考古学的な資料からする生業の検討はどうか。これも今迄の調査報告や概説をみるかぎり、容易ではなさそうである。なぜなら、ふつうの発掘で擦文時代の集落遺跡から得られる遺物は、形態的変異のすくない数種類の土器、ごく少量の石器と鉄器、土製紡錘車、少数の装飾品、カマドをもつ竪穴住居、炭化材と稀に炭化種子、破片化して種別同定の殆ど不可能な骨片などにかぎられる。遺物量もすくなく、他の時期のように貝塚・骨塚あるいは大量の生産器具などが発見されることは、まず稀といってよい。墓地の検出例はすくなく、したがって人骨も殆ど発見されていない。この状況は、従来のままのアプローチでみるかぎり、香川三線遺跡においても例外ではないのである。かといって、資料が「あるにちがいない」というのはかない期待だけをもとにして当時の生業に関する仮説を組たてるのは、考古学の方法としては邪道ではないだろうか。

いかに資料が貧弱とはいえ、現実にはかなりの規模の集落が擦文時代を通じて各地に営まれていたし、大型の発掘調査も実施されているのである。だから現在までに入手されている資料を再検討し、かつ、すこしでも新しい研究手段を導入し、擦文時代の生業を再考してみる作業

*北海道大学 文学部助教授

が必要だといえる。いいかえれば、先入観にとらわれることなく、獲得された資料を如何に組合せて、擦文時代にみられる歴史事象をうまく説明する仮説が提示可能かどうかであろう。

香川三線遺跡においては、1986年度の発掘調査時だけで確認された竪穴住居は79で、もし、全面的に発掘がすすめば、おそらく100軒以上もの竪穴住居の存在が確実視されている。もちろん、こうした竪穴住居群が、同時に集落を構成していたのではないことは明らかである。しかしながら、ある年月の間、かなりの規模の集落が、この地に立地せざるを得ない背後状況も確実に存在していたのである。いったい、なにが擦文時代人をしてここにとどまらせていたのであろうか。この問題に解答を見出すためには、まず彼等がよって立つ生業が、何であったのかを知らなくてはなるまい。しかし、前にも述べたとおり一般的なこれまでの調査報告についてみるかぎり、生業にかかわる資料はあまりにも少なすぎる。従来の方法だけでは、生業を確実に論ずるための資料の獲得が困難なのである(たとえば大井晴男：1984, p.166)。こうした難点をすこしでもカバーするために、今回の香川三線遺跡発掘においては、これまで以上に積極的に微細遺物の採集を実施することが計画された。地点別に大量の花粉分析資料を確保するのは勿論のこと、いままで北海道内の遺跡においては実施されたことのすくないフローテーション法による作業も計画された。花粉分析から得られる古環境の変遷とフローテーション法で採集の期待される植物種子や残片を組み合わせて、生業についての手がかりをつかもうという訳である。

(2) 栽培植物の存在と農耕

擦文時代の遺跡から栽培植物の種子が検出されることは、かなり以前から知られていたことではある。たとえば、1952年には札幌西高校郷土研究部のメンバーによって、天塩郡豊富町豊富にある擦文時代の豊里遺跡4号竪穴住居床面から複数種類の栽培植物種子が検出されている(林善茂：1969, pp.202~203)。しかし、当時はこの発見のもつ意義についての認識レベルや同定の技術が現在とはちがひ、種子の同定などに若干の問題をのこす結果となっていた。当初ソバと同定され、北海道における最初のソバ栽培の資料としてながく信じられてきた種子が、30年以上も経過した後にはベニバナの種子であったことがつきとめられたのもその一例である(Crawford W. Gary：1985, pp.76~80)。1963年になると、当時、旭川博物館に勤務していた佐藤忠雄氏が、北見管内浜サロマにおける擦文時代の竪穴住居からアワ、ヒエの炭化物を250グラムほど検出している(林：1969, p.203)。1966年には、根室管内西月ヶ岡遺跡から擦文時代末期の竪穴住居床面からモロコシ(*Sorghum vulgare?*)とみられる炭化種子が植物学者前川文夫博士の同定で報告されている(八幡一郎ed：1966, p.82)。

こうした経過のなかで、擦文時代の生業は主として採集狩猟であるが、同時にきわめて小規模な植物栽培が伴っていたらしいという見解が研究者のなかで持たれるようになってきた(たとえば桜井：1967, p.70・p.82、大井：1970, pp.55~56)。

この頃、アイヌの農業について主として民族学的な立場から意欲的な調査をすすめていた研究者として、林善茂氏がいる。彼は、いち早くこうした考古学的な事例をとりあげ、擦文時代

それ以前の恵山式文化のなかにもその存在が予測されうると説いている(林1969：pp.203~208)。この段階で、考古学を専門とする者以外から、このような先見性にとんだ指摘がなされたことは、まことに賞賛に値するというほかはない。

その後、筆者も『シンポジウム〈アイヌ〉—その起源と文化形成—』のなかでそれまでもっていた擦文文化の生業に関する考え方を撤回し、この時代は農耕文化であって、ただ稲作が無い点で本州の文化と区別されるべきだという仮説を提案した(乳井ed, 1972：pp.50~52)。大井晴男氏も指摘しているように(大井1984：p.78、註234)、この時以来、考古学分野の研究者の中には、擦文文化の生業について二つの考え方がみられるようになる。つまり、林氏らによって説かれたような擦文時代の生業のなかで農耕の占める位置がきわめてマイナーであるとするもの(たとえば藤本強1979：p.198、1982：p.210、加藤晋平他1983：p.21~23)と農耕のウエイトがたかいとするもの(乳井ed：前出、吉崎1982：pp.217~219、吉崎1984：p.73)とである。

こうした議論とは別に、加藤氏は北海道内で山田悟郎氏の検出したソバ属*Fagopyrum*の花粉をとりあげて擦文時代の栽培植物についてふれ、さらにシベリアの考古学的資料を紹介しながら、これが北方系ルートではいりこんだ可能性を指摘した。さらに、擦文時代の農耕のありかたアイヌ民族に知られている原始的な農耕との間にみられるギャップが、筆者の提示した仮説(乳井ed, 1972：pp.239~244における吉崎の発言)で説明できることに同意している(加藤1985：p.266ただし初出は1980であるが筆者未見)。

しかしながら、これら議論の展開のなかで、いつも問題となったのは、藤本氏も指摘しているような生業を直接物語る考古学的な資料のすくなさである(藤本1982：p.110)。前にも述べたが、擦文時代の集落においては、その立地条件と発掘で検出される少数の鉄製利器はさておき生業に関連するデータといえ、わずかな栽培植物の種子と花粉がほとんどである。奇妙なことに、他の時期のように多数発見されてしかるべき獣骨や魚骨が意外に少ないのである。きわめて少ない、といったほうがよいかもしい。もちろん、それらは埋没中の破片化した種子や魚骨などの遺物を、どのような検出方法で採集したのかに問題があったかもしれない。こうしたトラブルを最小限にとどめ、通常、肉眼では検出がむづかしい乾燥した通常の土壌中の微細遺物を積極的に採取する方法として、1977年以来トロント大学のGary W. Crawford博士と共同ですすめてきたフローテーション法による微細遺物の検出を香川三線遺跡の発掘に導入することが好ましいと考えた。この方法は、縄文時代をふくむいくつかの遺跡において既に実績がある。最近の例としては石狩管内札幌市の北海道大学構内で発掘されたサクシュコトニ川遺跡調査の際においても、良好な結果が得られたことが判明している(北海道大学埋蔵文化財調査室ed 1986)。

(3) 試料処理の方法「フローテーション法」について

ここでフローテーション法について若干の解説をしておこう。まず注意していただきたいのは、ここでいうフローテーション法とは、通常の発掘においてしばしば試みられる水選別法と

は全く異なるものであることだ。つまり、炭化した木材の碎片や種子を水に浮かせて採集する方法であって、土壌を水で洗い流し、その残渣から目的とする試料を検出する方法だけではない。フローテーション法にはいくつかの手法があり、それぞれ一長一短がある。大量の試料を短時間に処理しようとするれば、フローテーション専用開発された機器を使用することが望ましいし、人手をかけることが出来るのなら、大型の水槽と地学用の2～3種類のスクリーンがあれば実行可能である。今回はトロント大学で開発されたフローテーション機器を利用して処理をしたが、サクシュコトニ川遺跡(北海道大学埋蔵文化財調査室ed 1986)の発掘では、後者の方法を用いて好結果を得た。土壌の性質や状態にあわせて注意ぶかく処理をすることが出来れば、どちらの方法で実施しても結果はほぼ同様である。ここにそのプロセスを示しておく。

フローテーションの方法

手順概略

サンプリング

↓
乾燥

↓
フローテーション実施(1回目)

↓

- ①バケツに水をはる。(50～70%)
- ②乾燥した土(5～15 l)をいれる(5～10秒で炭化物が浮く)ここで余り時間をかけると浮いた炭化物がまた沈んでしまうので注意。軽くかきまぜる。
- ③上ずみ水をスクリーンでこす。(0.42mmメッシュを下に、2.0mmメッシュを上にかさねて使用)。
- ④スクリーンにたまった炭化物を布で包んで乾燥。

↓ ※スクリーン(フルイ)
乾燥

↓

：炭化物中より種子撰別
：同定

- ：地区地点・層位(焼土・炭化物層・覆土など)のサンプリング
- ：サンプル量を記録
- ：土をくだきながら乾燥させる。湿った土のままでは、炭化物はほとんど浮かない。

残渣水洗

- ①浮游物を採集した残りの水をすてる。
 - ②残った土の粘土分を除去するため1.41mmメッシュのフルイで軽く水洗い。
 - ③残った砂粒等を乾燥。
- 【注意】
- 作業過程で使用するフルイのメッシュサイズをかえると、比較検討が不能になるから注意すること。
 - 泥を洗い流した方が2回目にはよいがあまりしつこく洗うと微小種子の大半を流してしまう。少量ずつやるとうまくいく。

↓
乾燥

■この乾燥を十分にやれば、2回目のフローテーションで、ほぼ完全に炭化物質を撰別できる。

フローテーション実施(2回目)

フローテーション繰返し
浮游遺物採集

乾燥
↓

：炭化物中より種子撰別
：同定

↓

残渣水洗

乾燥
↓

：残った砂粒等より、骨片・微細遺物撰別。
：同定

必要な道具

バケツ(15～20 l)、プラスチック製の角ザル、布(素材ポリエステル、織目のこまかいもの)。金属フルイ(0.42mmメッシュ、2.00mmメッシュ、1.41mmメッシュ)
■地学用の金属フルイを利用する。

【北大フローテーションシステム】

(4) 香川三線遺跡における分析結果

前述の方法を用いて香川三線遺跡の発掘から得られた 1)骨片含有土壌 2)カマド内焼土 3)貯蔵穴内土壌 4)柱穴内土壌 5)住居跡外土壌の5グループ計24点の試料を検討した。このうちカマド内焼土の試料は燃焼の程度がたかく、種子は検出できなかった。柱穴内土壌については、包含されている炭化物質の量がすくなく、同定可能な試料が若干得られたのみである。住居跡外土壌は、予想外に攪乱もしくはサンプリング時に問題が発生していたらしく検討から除外せざるを得なかった。骨片含有土壌からは種子は検出できず、フローテーション法による残渣中からは予期されたごとく魚類の骨片が回収されたが、明確な同定に耐える標本が得られていない。ただ、この資料については走査電子顕微鏡でチェックすれば若干のものが同定可能であろう。しかし、時間の関係でこの検討が実施できなかったため、次年度に結果を報告する予定である。したがって、今回検討できたのは、残念ながら貯蔵穴内土壌から検出できた炭化物質碎片のみである。これについてはGary W. Crawford博士が主として同定にあたって、本書のなかで同定結果を述べているように、オオムギ*Hordeum vulgare* 3点、キビ*Panicum miliaceum* 5点、アワ*Setaria italica* 1点が検出されている。そのほかに、同定可能ではあるが明らかに雑穀の仲間と考えられるものが6点検出されている。

香川三線遺跡から得られたこれら全ての栽培植物種子は、前出のサクシュコトニ川遺跡の試料にくらべて保存が悪い。種子表面がとんでいたり、かなりの侵食がみられ同定から除外せざるを得ないものが多かった。多分、埋没時前後の条件が、サクシュコトニ川遺跡とは異なっていたからであろう。だが、種子の保存状態や検出された量の制約をこえて注目しなくてはならないことがある。それは、香川三線遺跡においてもサクシュコトニ川遺跡で判明した擦文時代前半の栽培植物種子コンプレックスのうちの重要なものが、出現していることである。

たしかに、資料の量的な制約もあり、この遺跡から検出された種子コンプレックスからのみでは、最終的な結論を引出すことは困難である。人間の移動や交易にともなってこれらの栽培植物種子が持ち込まれる可能性を拭いさるわけにはいかないからだ。しかし、山田氏の検討した花粉分析の結果を種子分析の結論とだぶらせてみると、ひとつの仮説を引出すことが可能であると考えられる。

つまり、花粉分析からすれば、香川三線遺跡周囲にはかつて陽地性草本群落がひろがっていたことが明らかであり、かつ、アカザ・ハコベ、タネツケバナなどの、いわゆる畑地雑草が存在していた。山田氏が本報文中で指摘しているように、この状況は当時この周囲に耕作地の存在していたことを想起させるものといつてよい。それを証明するかのように、ここからソバ属 *Fagopyrum* の花粉が検出されている。

ちなみにソバ属 *Fagopyrum* の花粉は、擦文時代よりはるかに古い縄文時代後期～晩期からも報告例が増加しつつあり（辻誠一郎ほか1983：p.312、山田1986：pp.88～106）、最近では縄文時代前期に相当する地層から、焼畑の存在を示唆するような状況で検出されはじめた（Tukada et al, 1986, pp.632～634）。もちろん、北海道の擦文時代遺跡からの検出例も多い（山田ibid.）。

こうした事例は、ソバ栽培が縄文時代前期頃から開始され（Tukada et al. 1986, p.634、Crawford：1983 pp.38～41、吉崎：1986, pp.306～308）、その伝統が後世まで引き続いた事を示している。おそらく北海道の大部分の地域も例外ではあるまい。

ソバが初期農耕のアイテムとして存在しているならば、これが単独の形で古代人に採用されていたとは考えづらい。多数の民族例にもみられるように、他の種の栽培植物、つまり焼畑農耕で通常セットになって利用されている雑穀類が、同時に存在していた筈とみてよい（この見解については、たとえば佐々木高明：1971に詳しい）。

報文にも記載されているように、香川三線遺跡で発掘された住居跡床面からは、赤道経が45ミクロン以上のイネ科花粉が山田氏によって検出され、これらは栽培種に由来する可能性がよいと推定されている。たしかに、イネ科の花粉だけでは、まだどの種の雑穀が存在していたのか確実な判定は困難であるかもしれない。しかし、花粉分析のデータからみれば、ソバ栽培が行なわれていたのは確実であるから、山田氏の判断は、むしろ当然というべきなのである。いかえするなら、香川三線遺跡から検出された雑穀種子、すなわちオオムギ・アワ・キビなどは、原始的な農耕活動、おそらく焼畑農業を背景としたコンテキストの中で理解されるべき資料なのである。本報文でみるように、香川三線遺跡CH-36床面から鉄製鎌が一点検出されているが、こうした農耕具の存在も上述の仮説を補強するものである。

(5) 擦文文化の農耕 仮説と展望

前にも述べているように、筆者が擦文文化（この定義には問題があるが……）を農耕文化だと表明したのは、1971年におこなわれたシンポジウム・アイヌの席上である。この記録は、翌1972年に北大図書刊行会から出版されている（乳井ed 1972, pp.50～52）。この時点で擦文文化を農耕文化だと考えたのは、シンポジウムの前年の1970年に、北海道文化財保護協会が実

施した石狩管内恵庭市柏木川遺跡の調査結果が、きっかけとなった（高橋正勝 ed., 1971：p.3およびpp.16～17）。それは、ここから発掘された擦文時代の墳墓の副葬品として、土器以外に鉄製の鎌と鋤（鋤）がセットで検出されたからである。これが擦文文化の性格を考え直させる最大の動機となった（乳井ed., 1972：pp.50～52、223～241にかけての吉崎発言）。出土した遺物を最優先して考える筆者としては、農耕器具である鉄製鋤先や鎌の北海道内からの出土例（河野広道1959：pp.89～92）があること⁽¹⁾、前述したように住居からのみならず墓地のなかに農耕器具を副葬した例があること、また、少数ではあったにしろ栽培植物種子が報告されていること、さらには桜井氏によって当初注意され（桜井1962：pp.287～288）、ついで駒井和愛博士ら東京大学のグループによっても指摘されているように、穀類を煮沸することを想起させるような本州の土師器住居に類するカマド付き住居構造の突如の出現⁽²⁾（駒井ed., 1964：p.156）などの事象を最も良く説明できる仮説として、擦文農耕文化論に到達せざるを得なかったのである。

1970年代の後半になると、北海道内の遺跡調査においても、専門家の手による花粉分析がしばしば実施されるようになる。その資料が蓄積してみると、まず、花粉としても特徴があり栽培植物であることが確実なソバ属 *Fagopyrum* がオホーツク海に面する一部の遺跡をのぞき検出されはじめたことがわかる（山田1986：p.95～96）。花粉の検出にひきつづき雑穀そのもの、つまりアワ、キビ、マメ、ムギなどの栽培植物の種子の発見例も増加していくのである。山田氏もしばしば述べているように、植物遺存体のうえからも擦文時代農耕の輪郭が明らかにされるようになってきている。この研究調査の流れのなかで画期的だといえる資料が、1981年からはじめられた石狩管内札幌市北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡の調査で出土する。それは、総計で20万粒をこす擦文時代の炭化種子資料である（北海道大学1986 吉崎ed., 1986：21 p）。参考迄にそこから発見され、Gary W. Crawford博士によって作成され種子組成リストをあげておこう（Gary W. Crawford 1986：p.6）。

学名	英名	和名
Cultigens		
1. <i>Hordeum vulgare</i>	barley	o-mugi
2. <i>Triticum</i> c.f. <i>T. aestivum</i>	wheat	ko-mugi
3. <i>Panicum miliaceum</i>	proso or broomcorn millet	kibi, inakibi
4. <i>Setaria italica</i>	foxtail millet	awa
5. <i>Oryza sativa</i> var. <i>japonicum</i>	rice	kome
6. <i>Vigna angularis</i> var. <i>angularis</i>	adzuki	azuki
7. <i>V. radiatus</i> var. <i>radiatus</i>	mung bean	ketsuri-azuki
8. <i>Cucumis melo</i>	melon	uri, makuwa-uri
9. <i>Perilla frutescens</i> var. <i>crispa</i>	beefsteak plant	shiso

10. <i>Cannabis sativum</i>	hemp	<i>asa</i>
Weedy Grains/Greens		
11. <i>Polygonum</i> sp.	knotweed	<i>tade zoku</i>
<i>P. densiflorum</i>		<i>inu-tade</i>
<i>P. sachalinense</i>		<i>o-itadori</i>
12. <i>Echinochloa crusgalli</i>	barnyard grass	<i>inubie, ta-inubie</i>
13. <i>Gramineae</i>	grass family	<i>ine ka</i>
14. <i>Rumex</i> sp.	dock	<i>gishi-gishi zoku</i>
15. <i>Chenopodium</i> sp.	chenopod, goosefoot	<i>akaza zoku</i>
Fleshy Fruits		
16. <i>Solanum nigrum</i>	black nightshade	<i>inu-hozuki</i>
17. <i>Physalis</i> sp. c.f. <i>P. alkekengi</i>	Chinese lantern plant	<i>hozuki</i>
18. <i>Empetrum nigrum</i>	crowberry	<i>gankouran</i>
19. <i>Rubus</i> sp.	bramble	<i>ki-ichigo zoku</i>
20. <i>Vitis</i> sp.	grape	<i>budo zoku</i>
21. <i>Actinidia</i> sp.	silvertine	<i>matatabi, kokuwa</i>
22. <i>Sambucus</i> sp. c.f. <i>S. seiboldiana</i>	elderberry	<i>ezo-niwatoko</i>
23. <i>Cornus</i> sp.	dogwood	<i>mizu-ki zoku</i>
24. <i>Phellodendron amurense</i>	Amur corktree	<i>kihada</i>
Others		
25. <i>Rhus</i> sp.	aumac	<i>urushi zoku</i>
26. <i>Ostrya japonica</i>	ironwood	<i>asada</i>
27. <i>Potamogeton</i>	pondweed	<i>hiru-mushiro zoku</i>
28. <i>Allium</i> c.f. <i>A. grayi</i>	onion	<i>negi zoku; c.f. nobiru</i>
29. <i>Juglans ailanthifolia</i>	walnut	<i>onigurumi</i>
30. <i>Lathyrus</i> sp.	wild pea	<i>renri-zoku</i>

このリストにみられるように、ここでは栽培植物として、オオムギ、コムギ、キビ、アワ、コメ、アズキ、ケツルアズキ、ウリ、シソ、アサが検出されているのである。検出量の少ないのは、コメとウリで、前者は20粒、後者は2粒であった。他の種子にくらべて極端に少ないこれら2種については、現地生産のものであるかどうかについてまだ決定し兼ねる。より南の地域から持ちこまれたものである可能性が強いと考えられるからだ。しかし、他の種子については、現地生産のものと判断してよい。同時に発見されている雑草種子は畑地雑草としての性格をしめるものだし、山田氏による花粉分析資料もそれをうらづけている（北海道大学1986：pp.192~196）。サクシュコトニ川遺跡における重要な所見は、もう一つある。それは、ここか

ら出土した炭化物細片のなかに大量の植物の茎、小穂などの含まれていることが判明したことである。この所見は、同遺跡の報告作成時には不明であったが、1986年に実施された再精査で明らかになった。まだ走査電子顕微鏡による詳細な検討を経るまでには至っていないが、予備的な作業では、これら栽培植物のものであることがほとんど確かである。さらに注目されるのは、これらの炭化植物細片は、特定のグリッドに集中して出土する傾向がある。つまり、サクシュコトニ川遺跡の場合はムギ・キビ・アワなどの脱穀作業が、特定の場所で進行していたと見られる。これは、有元英夫氏が、アイヌの農業活動においては脱穀作業の廃棄物が特定の場所に集中し、そこがいわゆる「物送り場」的な性格をもつと記載していることに関連して興味深い（有元1916：p.40）。

筆者が知りたいのは、擦文時代にこうした栽培植物種子コンプレックスが存在したこと、本州の農耕地帯で開発された穀類を調理するのに適応したカマドをもつ竪穴住居が、北海道に普遍的に存在すること、少数ではあるにしろ鉄製鎌・鋤のたぐいが検出されることなどを、どのように理解すべきかということにつける。つまり、我々の入手しうる資料からすれば、擦文時代の人間は、まだこうした微細遺物の検出が組織的に実施されていないので状況のはっきりしない北海道東部地域をのぞき、採集狩猟活動に支えられながらも雑穀農耕を主とした生活を送っていたのではないかとみられるのである。その雑穀農耕は栽培種子コンプレックスの様相から考えて焼畑であった可能性が強い⁽³⁾。香川三線遺跡に居住していた擦文時代の人間も、出土資料からみれば、おそらくその例外ではなかっただろう。

この考え方は、従来主張されていた擦文時代の生業に関する理解とは、基本的な生産についてのウエイトの置きかたが逆転しているのである。そして、いわゆるアイヌ民族のもっていた、あるいはアイヌ民族について語られてきた過去200年の生業とも異なることになりそうである⁽⁴⁾。

しかし、未解決の問題も多い。それは香川三線遺跡の立地と集落の規模である。集落の立地パターンや関連する規模、さらに各遺跡の立地条件から推定される生業や文化などについては、藤本・大井両氏の詳細かつきわめて優れた作業がある（藤本1982：pp.44~107、161~210・大井1984：pp.1~201）。こうした業績をふまえて、両氏の説かれるように、香川三線遺跡を含めて一とくに立地と集落の規模からして一擦文時代の生業が河川漁主体のものであるかどうかについての再検証が必要であろう。次年度からの香川6遺跡の発掘と周辺遺跡の分布調査のもつ意味の重要性が、ここにも存在する。その際には、筆者がさきに提示した、shifting agricultureあるいはサケの産卵床の破壊など複合的要素が、集落の構成立地や移動の有力な原因になりうることを考慮して検討すべきであろう（吉崎1984：pp.72~73）。

擦文時代の人々が焼畑を中心とする農耕民であったとすれば、そのもつ意味は北海道だけにとどまらない。おそらく、本州東北部の古代史を考えるうえにも大きな影響をもつ。たとえば、文献史学の分野からしばしば問題にされる「山夷」と「田夷」問題（これについては新野直吉1979：pp.159~222）の解釈にも、稲作農耕民と焼畑農耕民という概念を導入して新しい視点で検討できるかもしれないのである。

残された最大の問題は、擦文農耕民と近世アイヌ民族の間にみられる生業の差をどう説明するか、であろう。残念ながら筆者は文献史学の分野にはうといので、明確に資料の提示はできない。しかし1916年に有元氏が蝦夷草紙のなかの「然るに彼国法にて、蝦夷地はすべての穀物の種を渡す事停止なりと、是嘆ずべきの甚にあらざるや云々」という記事や、西蝦夷日誌を手がかりとして述べている仮説『当時の権力が農業禁止の政策をとったためである』が、まことに魅力的なアプローチとして浮上してくるのではないだろうか(有元1916: pp.426~427)。同様な資料は、1786年御普請役佐藤玄々郎の手になる「蝦夷地之儀是迄見分仕候趣申上候書付」のなかに「古来より蝦夷地におゐて穀類を作立候儀は御法度之様に相成、……」とあることが浅井亨氏によっても指摘されているのである(浅井: 1979, pp.145~146)。こうした文献資料の捜査と詳細な検討がすすめば、擦文時代に大幅に採用されいながら北海道の近世アイヌのなかで衰退したとみられる農耕文化の問題解決にせまれるにちがいない。筆者が、かつてのべた有元氏と同様な見解、つまり蝦夷地における農耕の衰退過程は(乳井ed. 1972: p.52, pp.242~243)、あながち思い付きだけではなく、急速に現実味が生れてきたというべきかもしれない。

最後に、本文をまとめるに当って苫前町教育委員会、米村哲英、山田悟郎、Gary W. Crawford、椿坂恭代の各氏に御世話になった。深謝申し上げます。

補 注

(1) 鉄製鋤あるいは鎌、鎌の出土報告例は増加しつつある。たとえば以下の報告がある。

恵庭市柏木川	(柏木川遺跡)	鋤・鎌	高橋ed1971: p.3, pp.18~17
江別市元江別	(後藤遺跡)	鋤・鎌	直井孝一ほか編1981: p.44, p.58
留萌郡小平町高砂	(オヒラウシベツ遺跡)	鋤	峰山・宮塚編著1981: 本文編pp.26~27
余市郡余市町入舟町	(天内山遺跡)	鎌2点	松下1971: pp.47~48
千歳市末広	(末広遺跡)	鎌3点	大谷・田村1981: p.69, 1982: p.472

札幌市北海道大学
付属植物園内 (植物園内遺跡) 鋤 岡田惇子・吉崎昌一の調査による。未報告

(2) カマドにたいするこの考え方は、桜井氏が最初に指摘(桜井1962: pp.278~288)、その後筆者も含めて多数の研究者が独自に、あるいは先学の構想を引用してのべている。しかし北海道においてはコシキの出現は時代的・地域的に限られ、出土例は5指にみえない。だから北海道の擦文時代のカマドは穀類の調整に関係がないと主張する者もいるが、本州東北部の土師器を出土する遺跡からはコシキの出現頻度がきわめて低く、とくに新しい時期になるとこれが伴出しない。この傾向は擦文時代の様相によくにている。カマドの出現と採用は、調理システムの大革命であったことを認識すべきであろう。

(3) 焼畑については、まだ若干状況証拠的な部分がある。それはアイヌ民族が焼畑らしいものを記憶していないからだ。しかし、林氏はこの問題についてアイヌの農業神ヌサコロカムイの化身と考えられる蛇の起源にかんする伝説のなかに「火入」とおもわれるものがあることに注目、かつては知っていたらうと述べている(林1969: pp.28~29)。

筆者は、縄文時代人が焼畑をもっていたのであるから、北海道の原初農耕も焼畑の形をとっていたとみるのが良いと考える。因に1986年の南茅部町教育委員会小笠原忠久氏とGary Crawford博士の調査で、南茅部町白尻遺跡の縄文時代中期の遺跡から栽培種のアワ・ヒエが検出され、目下詳細な検討がおこなわれている。縄文時代の焼畑にともなう栽培植物としては、ソバ・アワ・ヒエ・マメ・エゴマ・アサなどがあつたと考えられて

いる。また若干新しい時期、おそらく縄文時代後期ぐらいからムギが加わった可能性がある。しかし乾燥した土壌の場合、水洗別方式では小さな種子はほとんど検出できないことに注意したい。

我々の経験では、弥生時代や擦文時代の遺跡においても、その土壌が乾燥している場合(つまり低地遺跡でない場合)には、フローテーション作業を実施しないと栽培植物種子を発見することはきわめて困難である。ましてや発掘作業中、肉眼だけで検出できるのは、大型の堅果類のみといつてよい。

(4) アイヌ民族が採集狩猟民のようにみられるのは、近世以降ではないだろうか。彼等は、主として宗教儀礼や他地域との交換経済のために毛皮が必要だったという可能性はないだろうか。また、本文末にのべるように、労働力確保のために政策的にアイヌ民族に農耕をさせないような方法がとられ、近世以降栽培植物種子や農耕に使用する鉄製器具の入手に制限が加えられていたのである。もし、この考えが正しいとすれば、本州から入り込んできた和人農耕民の差別感情が、アイヌ民族を貧しい? 狩猟漁撈民として扱いつつ、しかもその「感情」は近代になるにつれ増幅されていった可能性がある。豊かな大自然のなかに生活してきた狩猟民アイヌ民族という見方が、実は歴史の経過のなかで作りあげられた虚像である可能性が全くないといきれるだろうか。

引用文献

- 浅井 亨 1979: 蝦夷語のこと、大林太良編『蝦夷』所収、pp.115~156 社会思想社 東京
- 有元英夫 1916: 蝦夷と農業、「郷土研究」第4巻7号、pp.424~427 東京
- 大井晴男 1970: 擦文文化とオホーツク文化の関係について 「北方文化研究」第4号、pp.21~70
- 1984: 擦文文化といわゆるアイヌ文化との関係について 「北方文化研究」第15号、pp.1~201
- 加藤晋平 1985: 擦文期の栽培植物について pp.259~288、『シベリアの先史文化と日本』所収六興出版 東京(ただし初出は1980: 「北方科学調査報告」1号)
- 加藤晋平ほか 1983: 擦文期の生業をめぐって 〈座談会〉 「考古学ジャーナル」No.213、pp.21~27 東京
- 河野広道 1959: 北海道出土の大形U字形鉄器について、「北海道学芸大学考古学研究会連絡紙」19号、pp.89~92 札幌
- 駒井和愛編著 1964: 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻 192p. 東京
- 桜井清彦 1962: 擦文文化に関する若干の問題、「史観」65・66・67号合冊 pp.284~291 東京
- 1967: 『アイヌ秘史』220p. 角川新書 東京
- 佐々木高明 1971: 『稲作以前』316p. NHKブックス 147 東京
- 高橋正勝編 1971: 『柏木川』55p. 北海道文化財保護協会・日本道路公団 札幌
- 辻誠一郎・宮地直道・吉川昌伸 1983: 北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変遷「第四紀研究」第21巻第4号 pp.301~313 日本第四紀学会 東京
- 新野直吉 1979: 山夷と田夷、大林太良編『蝦夷』所収 pp.150~222 社会思想社 東京
- 乳井洋一編 1972: シンポジウム・アイヌ—その起源と文化形成— 285p. 北大図書刊行会 札幌
- 林 善茂 1969: 『アイヌの農耕文化』218p. 慶友社 東京

- 藤本 強 1979：『北辺の遺跡』248P. 教育社 東京
 1982：『捺文文化』235p. 教育社 東京
- 北海道大学編 1986：『サクシュコトニ川遺跡 I』271p. 北海道大学埋蔵文化財調査室 札幌
- 山田悟郎 1986：北海道における先史時代の植物性食糧について「北海道考古学」第22輯 pp.88~106
- 八幡一郎ほか 1966：『北海道根室の先史遺跡』82p. 根室市教育委員会
- 吉崎昌一 1982：「アイヌ民族の形成」pp.178~222 『アイヌと古代日本』所収 小学館 東京
 1984：捺文文化研究の諸問題「北海道考古学」第20輯 pp.65~74 札幌
- CRAWFORD W. GARY 1983：『PALEOETHNOBOTANY OF THE KAMEDA PENINSULA JOMON』200p. ANTHROPOLOGICAL PAPERS, No.73 UNIVERSITY OF MICHIGAN, ANN ARBOR
 1985：先史北海道のベニバナの発見「北方圏」52号 pp.76~80、北方圏センター
 1986：『北海道における初期農耕関連資料』21p. 吉崎編、北海道大学文学部 基礎文化論講座 人類学研究室 札幌
- MATUO TUKADA, SHINYA SUGITA AND YORKO TUKADA 1986：Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan NATURE VOL.322 14, ppz632~634
- 直井孝一ほか編 1981：『元江別遺跡群』435p. 江別市教育委員会
- 峰山・宮塚編著 1981：『おびらたかさご』本文編 193p.、図版編 147p. 小平町教育委員会
- 大谷・田村編著 1981：『末広遺跡における考古学的調査』上155p., 41pls., 千歳教育委員会
 1982：『末広遺跡における考古学的調査』下501p., 88pls., 千歳教育委員会
- 松下亘ほか 1971：『天内山』109p. 余市町教育委員会